

苗を食った鹿

昔、ゆふの郷に一人の真面目な農夫が住んでいました。その農夫はわずかな田んぼと小さな畑をもっていましたがある日、近くの原野を開墾して立派な田んぼをつくろうと決心しました。そして毎日、朝早くから夜遅くまで根気強く働いてようやく三反ほどの田んぼをつくりあげました。農夫は梅雨がくるのを待ってさっそく田植えをしました。苦労した甲斐もあってか、その後も好天が続き稲の苗もすくすくと成長していきました。ところが、とある夏の日のこと。いつものように農夫が田んぼの見回りをしていると、せっかく順調に育っていた稲の苗が食い荒らされているのを見つけました。そして周りをよく見ると、そこには鹿の足跡がたくさんついていました。「これは困った。このまま放っておいたら、鹿に全部食べられてしまう。」農夫は良い方法はないかと智恵をしばり夜も眠らずに考え、一つの方法を考えつきました。次の日、農夫は近くの雑木林から木を切り出し田んぼの周りに柵をつくりました。そして、とどこどころにわずかでワナをしかけました。そのワナは、鹿が稲の苗を食べようと首をつっこんだら角が引っかかって抜けないよう、工夫したものでした。そして、木陰に隠れて鹿が出てくるのを待ちました。しばらくすると、山から鹿たちが姿を現しました。ところが、柵が張り巡らされているので田んぼに入ることができません。そうこうしているうちに、ワナに首をつっこんで動けなくなりバタバタ暴れるようになりました。この様子をじっと見ていた農夫は「よし、やったぞ。」

と木陰から飛び出し、鹿をつかまえました。
そして、縄で足を縛りあげました。

「私が苦勞して一生けんめい田んぼをつくり
秋の実りを楽しみをしていたのに
その大事な苗を食ってしまうとは許せん。
今すぐその首を落としてやる。」

そう言うと、鹿の角を押さえてナタを振り上げました。
すると、鹿は涙を浮かべて訴えました。

「私はこのあたりに住む鹿の長です。」

この柔らかくておいしい若草は
あなたが育てていたとは知りませんでした。

私たちは野草が食べ物ですから
何も知らずに食べてしまいました。

お怒りのこととは思いますが

許していただけないでしょうか。

もし、今回のことを許していただけるのなら
一族すべての鹿に

『これより将来にわたり、人間がつくった稲の苗は絶対に食べてはならない』
と言いつけさせます。

そして、私たちがこの田んぼを守ります。」

鹿は真心を込めてお願いしました。

それを聞いていた農夫は

「ふむ。それは良いことだ。」

だが、ここでお前を帰したらそのままになるのではないか。

もし、本当にそうなら証拠を示せ。」

と言いました。

すると鹿は

「人間は人をだますことがあるようですが、

鹿の世界にそのようなことはありません。

私を信じてください。」

と言いました。

農夫は鹿の真心を疑ったのを申し訳なく思いました。

そして、鹿をかわいそうに思い

許し、逃がしてやることにしました。

命を助けられた鹿はお礼をいうように

何度も何度も振り返りながら

林の奥へ消えていきました。

* * *

それからというもの、ゆふの郷では

鹿に田んぼが荒らされるといことは無くなりました。

そして、この農夫の田んぼは毎年豊作が続いたということでした。

そのため、のちにこの田んぼを「頸田（くびた）」というようになったそうです。